黄雷のガクトゥーン異聞　アインクラッドの破壊者

OLDTELLER

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

物事には限度がある。

その限度から逸脱した規格外な男がソードアート・オンラインの世界に降り立つ。

ニコラ・テスラ（自称７２歳）

黄雷のガクトゥーンの主役である。

これは彼によって破壊された理不尽な世界の物語。

そう何事にも限度が必要という話

目次

1話 1

0話 5

∞話 8

1話

『プレイヤーの諸君、私の世界へようこそ』

低く落ち着いた、よく通る男の声が、遥かな高みから降り注いだ。

『私の名前は茅場晶彦。今やこの世界をコントロールできる唯一の人間だ。』

そう始まった男の言葉が現実世界へのログアウトができない理由を語り、この世界からの物理的な脱出をプレイヤーの命をたてに阻止している事実を告げた。

ＳＡＯの開発ディレクター。

若き天才ゲームディレクターにして量子物理学者。

ナーヴギアというプレイヤーをこの世界に縛り付けるハードの基礎設計者。

茅場晶彦の言葉だけに、その言葉には単純に嘘だと否定できない説得力があった。

運命が導くとおりに世界は娯楽（あそび）の場から、命を賭けた戦場（デスゲーム）へと変わろうとしていた。

そう、伝説の《白い男》。

この世界とは異なる歴史を歩んだ２０世紀初頭の世界より訪れた雷の魔人の介入がなければ――。

茅場晶彦がプレイヤー達に絶望に連なる恐怖を与えようとした時、《白い男》――《電気王》ニコラ・テスラ――は、その姿を現す。

２０メートルはあろうかという中身のない空隙が纏った真紅のフードつきローブに、相対するその姿もまた巨大だった。

「輝きを持つものよ。尊さを失わぬ若人よ。お前の声を聞いた。ならば、呼べ。私は来よう」

血のごとき赤に対するはその二つ名の一つが表すように白。

白い詰襟服はどこか軍服のようで。

首にたなびく襟巻（マフラー）の黒に僅かに蒼白い雷電を帯びて。
その両手に耀くは雷纏わせし機械籠手（マシンアーム）。
機械帯（マシンベルト）の稼動に伴って激しく瞬く閃光が走る。
――彼の瞳、輝いて――
――周囲に浮かぶ光の剣、５つ――
「絶望の空に、我が名を呼ぶがいい。　――雷鳴と共に。私は、来よう」
それは古い物語の英雄のように、《白い男》――ニコラ・テスラはそう口ずさみ。
その僅かにさびを含んだ声にひるむかのように、茅場の名を名乗った赤のローブがゆらめく。
対するニコラ・テスラはローブになど目もくれず、広場に集まったプレイヤーを見下ろしていた。
全てのざわめきが止まり、《白い男》が再び口を開く。
「ソードアート・オンライン一万のプレイヤー諸君。　運命に呪われたお前たち、全員」
そこで一呼吸を置き、ニコラ・テスラは宣言した。
「――私が、この手で、救ってやる」
それが真実であるかどうか、集まった一万のプレイヤーが考える間もなく、次の瞬間には５つの光の剣が眩く耀く電光を発し、全てのプレイヤーを飲み込んでいった。
そして蒼白い電光が全てを満たす中。
茅場が現れた時と同じ音。
リンゴーン、リンゴーンという鐘のようなアラームのようなその音に混じって、異形の鐘の音が響く。
それは代償を得て、ひとつの願いを叶えるという鐘の音に似て。
そして――一瞬の静寂の後、今度はソフトな女性の声が響く。
『ただいまより　プレイヤーの皆様に　緊急のお知らせを行います』
柔らかくはあるが茅場の声とは違う人工的な合成音声だった。
それはシステム音声。
システムの凍結を告げた声は現在時刻を告げ、ゲームのクリアを告

げ、最後にプレイヤーのログアウト処理を行うことを告げた。
そして次々と一万人のプレイヤーの気配が耀きの中で消えていき。
「なんというかこれは――反則（チート）だよ。　どうしたら、こんなに簡単に私の世界を奪うことができる？」
ただ二人残ったほうの一人、茅場の声が呆然とつぶやく。
「まるで性質の悪い二次小説のようだ。　あり得ない事象が世界を歪める」
「月の王（チクタクマン）呼ばわりか。　仮初の世界でありえないもなかろう」
その声に応えるテスラの声は淡々と。
「仮初の世界でどのように遊ぼうがお前の自由。　だがあの者達は、現（うつつ）の世界のもの。　お前のおもちゃではなく、世界は――お前の遊び場ではない」
「いったい……貴方は誰だ？　英雄（ヒーロー）にしても規格外すぎるだろう」
対する茅場の声には、どこか畏怖がこもって。
「私は世界の敵だ。《史実の書》とは、遠くかけ離れた世界の御伽噺」
《雷電魔人》はただただ淡々と事実を告げる。
「――故に、現（うつつ）の世界ならばともかく、我が身に纏いし雷によって創られしこの世界。　壊すのは容易い」
「二次小説ではなく御伽噺か……どういう意味かは解らないが、事実のようだ。　それで私をどうするつもりかね？」
それは世界の創造主である茅場晶彦が出した敗北宣言だった。
「別にどうするつもりもない。　ここは私の世界ではなく、現（うつつ）に私の居場所はない」
勝利したつもりもないとそう答え、テスラはどこか遠くを見つめた。
「それに、どうやらまた私を呼ぶ者がいるようだ。　今度こそ彼の地。学園都市（アカデミア）ならばいいが――」
そして彼は名乗らぬままに何処かに去り、茅場が残ったアインクラッドは崩壊していく。
何の物語も生まずに。
創造主として茅場晶彦が光景はこんなものではなかった。

彼が望んだのは可能性(ゆめ)であって、幻想譚(おとぎばなし)などではない。
実験は失敗だ。
命を淘汰する事でこそ生まれる可能性(みらいのせかい)は閉ざされた。
どこかで誰かがそう告げたような気がした。
それは茅場晶彦の心の声だったのか？
もしテスラがそれを耳にしたなら彼の《発明王》の昏き意志と同質のものを感じただろう声。
「だからこその世界の敵――か？」
悲劇の中でこそ耀く人の生を、見た事もない光景をただ見ることを願った非情の男。
無情な自然法則(げんじつ)と確率(すうじ)だけを信じる狂科学者。
人になりそこねた哀れな道化(おろかもの)。
自らを敗残者と認定した茅場晶彦のつぶやきがアインクラッドに響く。
その孤独な創造主の言葉に応える者はすでにどこにもいなかった。

0話

何十あるいは何百人目かの茅場晶彦のつぶやきがアインクラッドに響いていた時。

「やはり、これは月の王の仕業か。時間牢獄とは違い完全に同じ世界が閉ざされているわけではないようだが……」

幾度となく同じ時間軸のしかし別の平行世界で無数の人々を救いながらも、誰にも感謝されずただ忘れ去られる法の《ふるきもの》の独白もまた世界の狭間に響いていた。

そう、同じ世界で時が巻き戻っているのではない。

世界の敵たる幻想故に、ニコラ・テスラにはその事実が判る。

「だからこそ、月の王がやりそうな実験ではあるが――」

本当に月の王が企みそうな悪趣味ではあるが、本当にそうなのかは判らない。

あるいは無限に連なる平行世界で生み出された仮初の世界を突き抜けているだけなのかもしれない。

もし、そうならば電子世界に囚われた人々を助けずにただ通り過ぎたほうが、彼が本来いるはずの世界にたどり着くためには、良い方法だろう。

彼の世界には打ち倒すべき敵がいるから。

ガクトゥーンの鐘を打ち砕き、彼の地に降り立たなければならないのだから。

マルセイユ洋上学園都市には、薔薇に呪われた10万学生が、なにより黄金の輝きが待っている。

あの輝きがある以上、ニコラ・テスラが平行時空の狭間で迷うことなどはない。

だから、冷たい方程式に心を奪われた者なら、彼の行いを偽善となじり嘲笑うだろう。

そして、効率的で最も良い方法こそが自分達にとって好い方法で、善きものなど何処にもないと騙るだろう。
けれどニコラ・テスラは、それを好い方法だとは思わないし、善い方法ではないと断言するだろう。
彼でなくてもそう思う者は多いはずだし、出来る事ならと心のままに正しいと思う事を行う者も少なくはないだろう事例ではある。
だが、それが一度限りの労苦でなければどうだろう？
一つの世界を――それが仮初であるとはいえ――創造主から奪うのは、そう容易いことではない。
嘘をつけない身である《ふるきもの》として口に出したように、壊すのは容易い。
だが淡々とした彼の様子に茅場晶彦が想像したほど、テスラの行った偉業は易々と出来るような事ではなかった。
そう、例え《雷電魔人》と呼ばれる彼にとってさえ――。
重機関都市ニューヨーク《大消失》で失われた数百万の命――自身の助けられなかったその百倍の人々を助けると誓ったニコラ・テスラならばこそ、その繰り返しを無為とも思わなかったが、常人ならば同じに見える出来事の繰り返しを抜け出すために、救える命を見捨てていたかもしれない。
「あの男に月の王が干渉していたのなら――」
テスラに見捨てられたプレイヤー1万人の苦悩が望みなのか。
あるいはテスラの誓いなどは無意味であると認めさせたいのか。
これは実験なのだと嘯く《発明王》ロード・アヴァン・エジソンの声を思い出し、ニコラ・テスラは歯を噛み締めた。
かつて《雷の鳳》と出会ってより後、テスラから忘却は失われている。
《ふるきもの》の法により、彼自身が出会ったものからは忘れ去られてしまっても、テスラは全てを忘れない。
「テ・ケ・リリ」
テスラの覇気に応えるように雑音とも鳴き声ともつかない何かがその首元で響き。

テスラは次の電子世界（アインクラッド）が目の前に迫っている事に気づく。
そうして、《世界介入》を行うこともなく、電子世界（アインクラッド）の法則（プログラム）を瞬時に塗り替えた《雷電魔人》は、ソードアート・オンライン一万のプレイヤーを救うため、新たなアインクラッドへと降り立った。

1話へ続く

∞話

「ここか――」

俺は《ダイシー・カフェ》の無愛想な黒いドアに掛けられた無愛想な木札に書かれた【本日貸切】という無愛想な字を見ながら、誰言うとなくつぶやいた。

今日はアインクラッドで出会った《白い男》を覚えている者達が、彼に感謝するために集まったオフ会だ。

何故か《白い男》に関する記憶はＳＡＯプレイヤーの大半が失ってしまっていた。

憶えていた者達も不思議に直接的な記憶はあいまいになっていっている。

それは不思議すぎるほど不思議で、一時はそのニュースにとびついたマスコミも、今ではそんなのは幻だった。

集団幻覚の一種だと言い出し、都市伝説になってしまっていた。

それというのも、ＳＡＯのデータが全てのコンピューター上から消え、茅場晶彦が逮捕された後も沈黙を守っているために、あの《白い男》の存在を証明するのは、俺達の記憶だけだからだ。

そして、その記憶さえも僅か数ヶ月前の事だというのに、徐々に薄れていっている。

確かにナーヴ・ギアには俺達の脳を焼く仕掛けがしてあったのに、死者が出なかったのも不思議なら、データ消失も不思議。

この事件は謎だらけで終わってしまった。

そして誰もが《白い男》の記憶を不自然に失っていく。

それなのに誰もそのことを気にもとめずにいる。

まるで、あの出来事が御伽噺かなにかだったように。

けれど――確かに俺達はあの《白い男》に救われた。

それを最初に忘れないようにしようといったのは、アスナ。

サークル《白い男研究会》の会長だ。

一時期乱立した《白い男》スレで知り合った女の子で、《白い男》の

事を憶えていた俺達は、それに賛同した。
何故かは解らないけれど《白い男》の事を忘れてはならないのだと感じていたからだ。
あの幻想（ヴァーチャル）の世界の中にあってさえ幻影（まぼろし）のような情景がとても大切なもののように想えたのだ。
アスナもそれは同じで、そこから俺達は親しくなり、本名や個人情報を交換するようになっていた。
彼女の本名も結城明日奈（ゆうきあすな）で、そのまま呼ぶと呼び捨てになるのだが、本人がそう呼んでくれというので、俺はアスナと呼んでいる。
ネットでは何度も会話やチャットをした相手だが、まだ実際に顔を合わせたことはない。
そう。今日、俺達は初めて会うのだ。
柄にもなく緊張で強張った表情を緩め、ドアを開けようとした時。
「キリトくん？」
後ろで電話越しでも綺麗な声だと思ったアスナの声がして――――
――
そうして俺達は出会った。